私は、日本の奈良県天理市にある天理教教会本部の准役員を務めております、松田理治（まつだまさはる）と申します。天理教はこの「諸宗教の集い」には数多く参加してきており、これまでに本教の教義や活動を紹介してきました。このパネルディスカッションのテーマは、″The Ages of Human Life″、即ち「人間生命の時代」であり、「長寿社会における世代間の繋がりについての宗教的考察」を話し合うことから、天理教の代表としてこのテーマに沿って、宗教の役割についての考えをお聞き頂きたいと存じます。

私は大きな家族の中で育ち、両親、祖父母ともに天理教の役員を務めていたことから、小さい頃から将来は彼らのような立場になるのだろうと思っていました。その前に一つ説明しておかなければなりませんが、天理教では「男松女末の隔てなし」と教えられている如く、聖職者になるには男女の差別はなく、結婚についても可能であるばかりではなく、むしろ奨励されています。私は三十一歳で結婚し、その時には妻は二十五歳でした。現在は三人の子供に恵まれています。一番下の娘が生まれた時、私共の家族は全部で八人（一番上は九十七歳で、一番下が生まれたばかりの乳児）おりました。一時、妻と子供たちと私は、シンガポールでの用務のため、八年程実家から離れて暮らしていました。私共の子供たちからの手紙や電話は、いつも私の祖父や両親に喜びを与えました。

祖父は百歳でこの世を去りました。最後の十五年間は主に寝たきりの状態で、いつも介護が必要な状態でした。私の二男は生まれつき斜視があります。事実、こんな状態が、あらゆる面で大変であったことは否めませんが、「この家族に介護や病気がなかったら良いのに」と思ったことは一度もありませんでした。と言うのも、人間にとって老いや病は、誰にも避けられないものであり、何らかの世話取りを必要な人と一緒に暮らすことは、どこにおいてもあるものです。起こってくる全ての物事には理由があり、それらには神様の思召があることから、受け入れるということが何よりも大切です。私の家族は決して裕福ではありませんが、幸福でした。何故ならいつも喜びをもって物事を受け入れ、信仰と共に困難に対処していたからです。私共は、神様は良き人間には必ず良きことをして下さるという、純真な考えの下で結ばれていました。こうして私共一人ひとりはより良き人間になろう、つまり心の成人の道を辿ろうと努めていたのです。

祖父が他界した時、言うに言われない深い悲しみが家族を襲いましたが、私共はこれを喜びと捉えることができました。何故かと言うと、祖父の介護をこれからしなくても良いということではありません。それは、彼が長寿を与えて貰ったということ、そして彼によって家族が一つにまとまり、人間としての成長ができたからです。長寿というのは、神の恩恵に他ならないものなのでしょうか？それはその人の住まうところに愛があるかどうかにかかっていることでしょう。

今日の長寿社会には、数々の社会問題を孕んでいます。多くの老人が本来いるべきところから除外され、一人で暮らしている。貧困が発展途上国のみならず、先進国にもはびこっている。病気はいつになっても無くならない。よって、社会的弱者の数は増える一方である。人口の増加は環境問題と直結している。児童虐待、性的虐待のニュースはもう聞きたくもない、等々。長寿社会は「複雑な社会」と言い換えられるでしょう。これら現代の問題に対する答えを見出すのは簡単ではなく、こうした混乱は私たちを更にさまよわせるばかりです。

宗教的奉仕に日常を捧げる私たち、つまりあらゆる言葉で言い表される、聖職者

と呼ばれる人々に課せられた使命は、アクションを起こすということです。社会問題に関しての意見や決議を声に出すことは、他の人々に影響を及ぼすでしょう。しかしながら、それよりももっと重要且つ説得力のあることは、例えば身近なことからの実行です。家に早く帰るようにし、家族との時間を大切にしましょう。親に感謝の意を表し、孝行をしましょう。子供には良きことを教え、決して学校まかせにしないように。愛と慈しみの心を、老人、若者、そして障害のある人々に注ぎましょう。これらを信者たちに説得力をもって教えなければなりません。家族を愛せない人は、他の人々を愛することはできないでしょう。

私たちは理想を追い求めます。しかし、同時にその実現のために、実際に行いに表しているかどうか反省しなければなりません。天理教では、

をやこでもふう／＼のなかもきよたいも　みなめへ／＼に心ちがうで
おふでさき　五８

と教え、また、

皆んな勇ましてこそ、真の陽気という。めん／＼楽しんで、後々の者苦しますようでは、ほんとの陽気とは言えん。
おさしづ　明治三十年十二月十一日

と教えています。私たち一人ひとりは皆違い、特有の存在です。然るに、皆それぞれ完璧でないという共通点があります。天理教の目標とするところは陽気ぐらしであり、世界中の全ての人々が助け合い、楽しく暮らすことによって、神様にその喜びをもたらす生活のことを言います。私は天理教における聖職者として、人にそれを説く前に、まずは家族の中で互いに助け合いをすることを、身をもって示さなければならないでしょう。天理教は、

このみちハどふゆう事にをもうかな　よろづたがいにたすけばかりを
十三３７

とも教えています。それぞれの宗教は皆、目標を遂げるために教理があるのでしょうが、最も重要なことはまず家族の間でそれを実践することです。

時折、理想を高く掲げすぎるあまり、壮大な青写真を描いてしまう姿を見ます。私たちは、先ほど私が触れた現代社会の問題を解決するために、施設を建設しようと考えてしまいがちです。そのためには多くの寄付や、慈善活動や、政治上の協議も必要となるかもしれません。確かに、私たちの夢は、叶えばそれが良いに越したことはありませんが、やはり最前から言うように最も大切なことは、一足飛びに何かを拵えることより、小さなことでも身近なところからの実践だろうと思います。より多くの病院や、老人ホームや、ホスピスや、児童施設や、学校を設置することはもちろん良いことですし、天理教もそれらの施設を整える努力をしています。しかしながら、まずは自らの手で、病気で苦しんでいる人の世話取りをし、老人の面倒を見て、子供たちの信仰を育む教育をしているだろうかと、自分自身に問うてみて下さい。家族と一緒に住んでいないのなら、隣人や友人や同僚に手を差し伸べて

みましょう。誰でもできる単純なことから始め、そして多くの人を巻き込んでいきましょう。それが目標に至る道理だと信じています。

私の話を終える前に、一つだけ付け加えさせて下さい。世界の総人口が増加の一途をたどる中、多くの国では人口が減っているという現象があります。それは居つくかの宗教では、信者が減少しているということにも繋がっています。この長寿社会では、若い信徒を育てるということも喫緊の課題です。

信仰の道に身を捧げる私たち聖職者は、信徒一同の模範となるばかりでなく、世界中の人々の模範とならなければなりません。二十世紀前半から中盤にかけての天理教のリーダーであった二代真柱は、「天理教とは何であるかと人から尋ねられた時、『私を見て下さい』と言えるようになってもらいたい」という言葉を残しています。皆さんには、この混迷を極める長寿社会において、世の人々の模範となれるよう努力しているだろうかということを、今一度自身に問うてもらうことをお願いして、私の話を終えたいと思います。

今回の集いが終わって家に帰ってからは、私は妻と朝食の準備をしたり、両親のためにお茶やコーヒーを用意したり、子供が学校に行く前に教会本部に参拝させたり等、でき得る簡単なことからまた始めることになるでしょうね。